

今年のトレイルオリエンテーリングの世界選手権 (WTOC2014) は、7月6日から12日にかけて、イタリア北部のトレンティーノ州とその隣のヴェネト州にひろがるドロミテ山岳地域の中腹エリアにテラインが散らばっており、イベントセンターのあるラバロネという町を中心に開催され、昨年に引き続き WOC との同時期開催となりました。

## プリ O 成績(二日間トータル) オープンクラス

1	Guntars Mankus	LAT	30点(256秒)
2	Marit Wiksell	SWE	30点(293秒)
3	Geir Myhr Oien	NOR	29点(103秒)
30	小泉辰喜	日本	26点(142.5秒)
39	茅野幸司	日本	26点(280秒)
40	木村治雄	日本	26点(306.5秒)

## パラリンピッククラス

1	Michael J	SWE	29点(313秒)
2	Ola Jansson	SWE	27点(73.5秒)
3	Geir Myhr Oien	GBR	27点(301.5秒)
30	高柳宣幸	日本	15点(255秒)
34	森 長三	日本	11点(257.5秒)

## 競技日程

7月6日	テンポ	モデルイベント、開会式
7月7日	テンポ	予選+決勝
7月8日	プリ O	Day1 モデルイベント
7月9日	プリ O	Day1
7月10日	プリ O	Day2 モデルイベント
7月11日	プリ O	Day2、団体戦、バンケット
7月12日	プリ O	リレーデモンストレーション

## テンポ(TempO)

7月7日午前中のテンポの予選は、ラバロネから山を下ったところにある、湖に挟まれた丘陵地帯で行われました。スタートまでまずバスで移動し、会場に戻ってくるコース途中に小さい尾根、沢が連続する斜面や、平坦な地形の中の溝などを使った6ステーションが設置され、それぞれ4課題ずつ出題されました(合計24課題)。上位陣が成績を伸ばす中で、日本チームからは、山口尚弘選手が奮闘し、19位で決勝に進

みました。

午後からの決勝は、予選会場から車で10分ほどの町の中にある、その昔ハプスブルグ家の庭園だった公園で行われました。選手はスタートエリアに隔離され、観客はゴールで選手たちの帰ってくるのを待っていましたが、ゴールからは、最後のステーションで選手が回答している様子が遠くに見られ、あれやこれやと話ははずみました。

決勝は、予選の成績下位からスタートして行きましたが、山口選手が247秒という非常な好タイムを出し、ゴール後にプレスのインタビューを受けました。その後も、あと10人、あと5人・・となる中で上位にくらいついていましたが、最終的には、わずか、なんと5秒差で7位にとなってしまい、残念ながら入賞には届きませんでした。わずかの5秒差! ホントに惜しかった。

山口選手のタイムは、決勝だけの成績を見る限りでは、堂々の2位タイとなるものでした。本来のIOF競技規則上は、決勝は決勝だけの成績で順位を付けることになっているのですが、昨年と今年に限っては、予選+決勝のタイム合計で順位をつけることが「逸脱事項」として認められていましたので、本来ならば日の丸が揚がるどころが、残念な結果になってしまいました。

## プリ O (PreO) Day1

7月9日のPreO Day1は、ラバロネから車で20分ほどのルゼルナ(Luserna)で行われました。この日のコースは、2ヶ所の非計時区間を挟んだ3つのパートに分かれ、通常コントロール19課題とTC2ヶ所で3課題があらかじめ予定されていましたが、前日の雨のため坂道での車いすの移動面に支障が生じ、第3パートの7課題とTC1箇所がまるまるキャンセルされ、結果的には合計12課題とTC1ヶ所2課題に短縮されて行われました。

第1パートは、前日のモデルイベントと同様のオープンな牧草地で、小凹地や沢、岩やこぶなどを特定する課題が出されました。第2パートは、一転して一部見通しの悪い部分もある林の中の岩や岩がけを使った課題が出され

ました。

第1パートが比較的素直な課題だったの比べて、第2パートの方では難易度の高い課題が出されましたが、その中で、10番コントロールで、手前の二つの岩を結んだ延長線と正解フラッグの位置関係が地図と現地で適合せず、キャンセルになりました。

このため、最終的には11課題とTC2課題での争いとなり、日本チームでは、オープンクラスの茅野選手が3位なり、十分に入賞を狙える位置につけました。パラリンピッククラスの高柳選手も14位となり、他のメンバーをふくめ、競技はまだ3分の1が終わっただけ…と気持ちを切り替えて翌日のDay2に望みを託しました。

## プリ O (PreO) Day2

7月11日のDay2は、WOCのミドルと同一場所のカンポムーロ(Campomulo)を会場に、そこから大きな尾根を越えたフット0とは反対側の斜面で行われました。前日のモデルイベントも同じ会場で行われたのですが、地図がまるまるWOCのミドルの競技エリアに含まれるため、ゴールで回収されでしまい、正解表もゴールに掲示されたものを確認しただけで配布されず、競技に対する反省や、戦略、心構えなどが出来なかったことが非常に残念でした。

さて当日、Day2も2ヶ所の非計時区間を挟んだ3つのパートに分かれて、通常コントロール20課題とTC2ヶ所で3課題、それに団体戦用のTC1ヶ所2課題で行われました。

この日のテラインは、牧草地の中に藪や小さな林が混在し、岩や独立樹などの特徴物も多く、前半は、比較的高い位置にある道に沿って、大きな凹地を見下ろすコースで遠距離の課題が中心で、後半は、逆にこの凹地の中に下って回りを見上げることになりました。この日は、現地の特徴物の一つ一つ、地図上の特徴物と突合させていき、フラッグの位置を特定する課題が多く出されました。

この日は満点の競技者がでなかったものの、3番や9番など正解率の低い課題がいくつかある中で、1ミスの19点

得点者が上位が並びました。日本チームはこれらの課題で取りこぼしが見られ、団体戦も含めて、残念ながら、上位に残ることはできませんでした。

Day2 では、信じられないことが起こりました。なんと、競技地図に磁北線が印刷されていなかったのです。しかし競技はそのまま進められ、成績は公式記録となりました。イベント・アドバイザーが地図の最終確認をしてOKを出した後、事情があって地図を刷り直し、そのときに印刷用インク切れが発生したのに、誰も気付かず競技が始まってしまったのでした。

本当ならば競技そのものが成立しないような事故でしたが、「みんなが同じ条件で競技をしたのだから…」ということで OK ということになりました。あってはならない「珍しいこと」でした。

## **新しい競技方式・タイム・コントロールの方法が変わった**

競技規則の改正を受けて、今年から WTC から TC の扱いが大きく変更になりました。

順位の決定に当たって、TC での正解が得点にならなくなり、プリ 0 ではまず通常コントロールの正解数で順位を決め、この得点が同点となった場合に TC でのタイム差で順位を付けることになりました。

Day1 のオープンクラスでは、11 点満点の競技者 8 名全員が TC を間違えていて、続く 10 点獲得者の中には TC を両方正解した競技者も多く、順位がかなり変動しました。

また、TC が得点にならなくなったためか、各競技者が正確さよりも回答のスピードを重視したためか、全体に TC での正解率が低かったようです。

競技方法でも、テンポのように複数の課題を 1 か所でまとめて行うようになり、回答時間が 1 問あたり 30 秒になりました。複数の課題をまとめて行うことについては、テンポ 0 でも経験していて、特に違和感はありませんでしたが、課題が 1 問だけの場合は、20 秒経過時点で「あと 10 秒」の警告が出されるので、競技方法の変更を強く感じました。

## **コースの分割について**

昨年の大会でもあったのですが、今回の大会でも、コース上に非計時区間があり、それを挟んで競技が行われました。

今年は、非計時区間を除いた競技時間を管理し、トータルの競技時間が制

限時間を超えていないかどうかをチェックするために Si カードが使用されました。競技者が各競技パートの始まりと終わり、自分自身でチェックをして、ゴール後運営者が Si カードから競技時間を読み取るのですが、運営面では省力化されたかわかりませんが、競技者の手元のチェックカードには、それぞれチェックした時間が記載されないため、競技時間があとどのくらい残っているのか競技者が自分自身で管理しなくてはならず、苦勞しました。このためか、Day1 では競技時間オーバーで減点された選手が目立ちました。

また、スタートからゴールまでのコースの中に非計時区間が設けられたため、競技上のコース距離が短くなり、それに伴って競技時間も短くなり、特に Day2 の 20 課題に対して 95 分という競技時間は、スタート前からかなり意識しなければなりません。

世界選手権では、すでにテンポが加わり、タイム・コントロールの方法が変わり、2016 年には団体戦の方式としてリレー競技が正式に採用されるなど、次々と新しい競技、新しい競技方法が導入されていますが、日本国内の大会でもこうした動きを積極的に、かつ素早く取り入れて、来年以降に向けた取組が進められようとしています。

日の丸の掲揚、違う色のメダル獲得に少し手間取ってはいますが、その時が近いことを信じます。

引き続き、トレイル 0 日本チームへの応援をよろしくお願いいたします。

(小泉辰喜)